
ココロノヤミヲトカスヒト

竹野千代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロノヤミヲトカスヒト

【Nコード】

N6495Y

【作者名】

竹野千代

【あらすじ】

夜は俺にとつて、底のない地獄だった。高原に出逢う迄は。生徒会の書記兼図書委員の人気者。そんな高原に誘われ図書委員になり、持っていなかった携帯でメールのやり取りをする内に……俺の心を蝕む闇は、少しづつ溶かされていくのだった。

一（前書き）

出来れば沢山の方に読んで頂き、冷静で的確な感想を頂きたいので、
よろしくお願い致します。

—

夜の闇に、墜ちていく。

夜は俺にとって、底のない地獄だ。

人間としての尊厳を奪われ、

信じてきたものや縋るものを踏みにじられ、

獣の様に地を這わされる。

夜の深淵に足を掴まれ、引きずり込まれて――

俺の一部が、また死んでいく。

心が、欠ける……

やっと死んでくれた。まさか誰かの死を喜ぶ事になるなんて、親が知ったらビンタどころの話じゃないだろうけど。

だけど、ようやく解放された、という安堵は嬉しさをしか俺に抱かせない。俺がどんな目に遭ってきたのか、話してやれでもしたらきっと、同情の後に、「そりゃ仕方ないな」と誰もが思うに違いない。

――やっと死んでくれた。その事実を、俺は一人噛み締める。もう怯えずに済む。急に乱暴にドアが開けられる事も、頬をはたかれ床に引き倒されのしかかられる事も、激痛の屈辱に歯を食いしばる

事ももうないのだ。

もう、誰かに支配される事もないのだから。

平和な毎日。だけど暗く引き籠もってしまっていた期間は長く、以前の様な明るさで皆と向き合う事は出来なくなっていた。

極度の人間不信。裏切りを経験すると、人を信じられなくなるもんだろう？ それだ。

好きな人でも見付けたら、心は癒されるのだろうか。傷付いた心が元に戻る事など、あるのだろうか……？

「橘！」

呼び止められ、足を止める。名前を呼ばれていながら自分から振り向く事は出来ず、俺は声の主が近付き、自分の体の前に回り込んできたのを俯いて見ていた。

今図書室で近くに居た高原が、立っていた。何か用、などと気易く尋ねる事など出来やしない、俺は隠せない警戒に身を硬くしたまま、窺う様に相手を僅かに視界に入れるだけだ。

……背、高いよなこいつ。殴られたら上からの体重が載って、かなり痛いだろうな。

息を整えて相手が喋れない少しの間にも、卑屈な想像が頭を占める。馬鹿か俺、と目線を反らした時にようやく、相手は口を開いた。「橘さ、本好きだろ。図書委員にならない？」

——突然、どういうお誘いだ？ ぽかんとして、俺は視線を目の前のメガネ君に戻した。

名を高原正直たかはら まさなおと言う。ちょいちょい同じ棚の似た様な本を探して図書室で逢うから、知っている。生徒会の書記なんかしている奴だ、

真面目なのにユーモアもあって、誰に対しても非常に優しいらしい。更に眼鏡の奥の優しい気な垂れ目が素敵、などと、ビジュアル面でも女子の人気は抜群らしい。男子クラスのうちの組でも、成績優秀で有言実行、そのくせ気さくな性格だと慕われている様な噂を耳にする。

そんな人気者が、何で俺なんかにそんな頼み事をするんだろう？理由が明らかにしないと口を開く気にはなれない、俺は黙って相手の言葉の続きを待った。

「委員メンバー、元々足りてないんだよ。俺も生徒会兼任でやってる位だし。今回一人転校しちゃうんで、更に人員不足になる。橘さ、よく本を正しい順に並び替えたりしてくれてるし、喋ったりしてマナーの悪い奴にそつと注意を促してくれたりもするだろ。そういう真面目な人にメンバーになってももらえたら有り難いんだ」

……まさか、そういう行為を人に見られていたなんて。意識せずにしていた事を改めて取り上げられると、何だか恥ずかしくなってしまう。答えに窮して、俺は視線を彷徨わせた。人気者の優男は続けた。

「橘が座つてるとさ、図書室利用者も増える筈！だからさ、頼むよー」

拝む様に手を合わせて、相手は頭を下げてきた。委員になる事自体は……突然で驚いてはいるが、まあ別に断固拒否、という訳でもない。随分困っている様だし、自分が手助けになれるのなら手伝ってみようかな、と思う。多分に人より本を相手にする事の方が多いだろうから。だけど、今気になるのは。

「……利用者が増える事、ないから。それ期待してなら他当たってばそつと言うのに、相手は顔を挙げた。ああ違う、俺が座ったつて利用者なんて増える訳ないよ、とか軽く返せばいいのに、……わざわざ相手に嫌な思いをさせる様な言葉を選んで。俺の馬鹿、俺つてば根暗！！」

反省に、唇を噛む。なのに相手はーふつと笑って、気を害して

いない筈はないのに、柔らかな表情と優しい声音で告げるのだ。

「綺麗な顔、してるのに……自覚ないんだ。もっと前髪短くすればいい、目元隠すなんて勿体ない」

主旨のずれた台詞と共に、すっと伸びてきた手が俺の前髪をさらにと掻き上げる――びくりと身を跳ねさせて、どうにか相手の手を乱暴に振り払う前に、後退り身を逃がすだけで済んだ。過剰な俺の反応にも動じない高原は、当初の目的を取り戻す様に問いの形を取った。

「図書委員さ。入ってもらえない？」

ばつの悪さ、だけで頷いたりはいしない。相手の真っ直ぐな強い瞳に何か引き寄せられてしまったらしかった。躊躇いがちに、俺は小さく頷いた。

有難う、と両手を取られぎゅっと握られる。逃げようにも相手の力は強く、僅かな接触にすらも反射的に怯える俺の手は、隠せない程に震えていた。

――相手の手が離されたのが俺の震えが止まった直ぐ後だった様に思えるのは、俺の気のせいなんだろうか？

明日委員会だからそこで橋を紹介する予定、と高原は昨日それだけ言って去っていた。委員会って、放課後か？ 図書室でやるんだろうか？ 疑問は浮かぶが、クラスが違う高原の元に聞きに行く事なんて出来る訳がない、またそんなに必死で知っておきたい訳でもない。今日と言う事さえ確かなら、どうでもいい。

お馴染みの消極的な自分が出した結論に納得していた一時限目の後の休憩時間、――高原が現れた。何やら教室内が騒めいた、と思ったら、高原が前のドアから顔を覗かせてきていたのだ。

直ぐにこちらを見付けたい、にこっと人好きのする柔らかな笑みを向け、あろう事か教室の中迄入ってきて――

「橘！ 今日放課後、16：45位からね。大丈夫？」

今が大丈夫ではない、何なに、と皆がひそひそ言い合っている声が聞こえてくる。こんな注目を浴びてしまうなんて……、かあつと赤くなり、俺は焦ってうん分かった、と早口で頷いた。それだけを見届けて、満足したのか高原は更に深い笑みを残し、待ってる、と意味ありげにも取れる様な一言を落とし、爽やかに教室を出て行った。

一旦しーん、と静まって、またざわざわと俺を遠巻きに見ながら教室内が騒めく。スター並みに皆の憧れや羨望の的である高原と、一人での読書の世界に没頭する事で外界との接触を極端に絶った俺との関わりの不思議に、皆黙っていられたかったらしい。意を決した様に、数人が声を掛けてきた。

「なあ、今日の放課後って何？」

「あいつと仲いいの？」

そう言えばクラスの誰かと言葉を交わす事自体どれだけぶりだろ
う、とふと考えて、はっと我に返り答える。

「委、委員会が。今日初めてだから」

なあんだ、と一斉に教室内が納得したらしい。ひとまずの皆の関
心が自分から離れ、俺はほっとする。

「新メンバーを紹介しまーす！！ 二年二組の橘海璃君でーす！」
たちはな

明るい声で、高原は俺の両肩に手を載せ、皆の前に差し出す様に
して告げた。

三年の教室を借りたこじんまりと並んだ委員メンバーは、本の借
り出しと返却の際の対応で顔を知っている人ばかりで、向こうも俺
を知ってくれているせいか、和やかな雰囲気の流れていた。人居な
かったから助かるよ、大変かも知れないけど頼むな、と気さくに声
を掛けられ、抱負を一言、と委員長に促され、一生懸命頑張ります

のでご指導宜しく願います、と当たり障りのない言葉で挨拶し、後は繰り広げられる話し合いを聞いていた。

皆が順に当番制で図書室での貸出し業務を行っている為、俺にもじきにカウンターに入る仕事が回ってくるらしい。でもその間に好きな本を読んで過ごせるのだとしたら、俺にとっては天国の様な委員だ。

閉会し、皆が解散し帰った後に、わざわざ俺の為に委員メンバーの名前をもう一度教えてくれたりして、高原は実に親切な奴なのだった。自然と笑んで有難う、と呟いていた俺に、高原はにっこり笑ってくれた。

「それはこっちの台詞。突然無理矢理誘ったのに、快く引き受けてくれた橘の優しさにこそ感謝だよ。俺ってば見る目あんだよね」

優しい口調、いい奴だなと素直に好感を持てる。男女問わず人気者な訳だ。こんな相手と交流を深められれば、心を覆う氷は溶けるだろう。人を信じてみようかと、止めていた足を踏み出せる様になるのだろうか……。

……期待する様な目で相手を見てしまってもいたのだろうか、何だかゆつくりと近付いてきた高原の顔が、その目が、今迄感じた事のない何か危うい空気を漂わせ、絡め取る様に……

「ーばつと勢い良く体を遠退けた、何だ今の雰囲気、と俺は焦る。キ……キス、されるのかと思った。

まだ悠然と不可思議な空気を纏わせたままに、高原の目が熱っぽく俺を見ている様に見えた。見えた、だけー人付き合いを長く絶つとこんな事になるんだ、と俺は自分の過剰な勘違いがもたらしてしまった恥ずかし過ぎる雰囲気をもとにか消すべく、武骨な声を挙げた。

「い、色々と親切にしてくれて有難う。今日は図書室閉館日だったよね、早く帰ってゆつくり出来る機会を有効に使わないと。また次に逢った時に色々教わろうかな、俺も今日は頭がいっぱいだから」

馬鹿みたいに予防線を張った俺の物言いをそうだね、と笑って流してくれた高原は、矢張りもう今はおかしなところもなく見えた。俺ってば何混乱してんだろ、と頬が熱くなる。他人とここ迄近い距離で過ごす事など随分久方振りで、妙に意識してしまった自分が勝手に変な妄想をしてしまっただけだった。

「図書当番表も一週間以内には出るだろうから、またその時にね。そうだ、連絡取り合うのにさ、メアド聞いておきたいんだけど」

ぴくつ、と俺は背筋を伸ばした。小さな声で、ない、と呟く。

「ない？」

「……俺、携帯持ってないから。パソコンもないし。ない」

「あ、そうなんだ」

珍しいな、と言われる事を構え、何となく感じてしまう劣等感に身が縮まる思いだ。だけど高原は違っていた。大した事ではないといった風に、さらりと会話を続けてくれるのだ。

「図書委員としては、メール出来たら嬉しいかも。言い忘れてたけど土日にも図書室開ける時あるから、予定当番日の当日の変更とか出ちゃうんだよね。そういう時の連絡とかにさ」

「ああ……」

それは必要だ、と俺は頷く。わざわざ連絡の為に高原に教室に来て貰うなんて、申し訳ないし恥ずかしい。考える俺に、高原は一言付け加えた。

「それにさ、好きな本発表しあったりさ、本以外の好きな事語り合ったりも出来るしね」

それには、咄嗟の返事が出来なかった。え？ とか馬鹿みたいに目を丸くする俺に、高原はお馴染みの柔らかな笑みで言うのだ。

「友達としてさ。橘とメール出来たら嬉しいな、俺」

無邪気な子供の様な顔で。どんな意味合いで発せられた言葉なのか。

いつの間にか高原と自分は友人になっっていたらしい、ただの知り合いではなく。それすらも何だかどきどきして消化しきれずに居る

のに、弾けんばかりの人懐こい笑顔を向けられて、俺にはどう答えればいいのか分からない。

目線を反らしながら俯いた俺に、真面目な声で高原が言い出した。「ごめん、携帯持つのお金も掛かるし、強制出来る様な事じゃないのにね。まあ連絡手段なんかさ、いつでも教室に言いに行けばいいし、靴箱に手紙入れたりも出来る話だしさ」

明るい高原の声、また相手に気を遣わせてしまっているー最大限に勇気を振り絞って、俺はばつと顔を挙げた。

「携帯っ、買、買おうかなって丁度考えてたところだったんだ。……本当に」

付け足した処が余計に不自然に響いただろうに、高原は深い穏やかな笑みで俺を見て、尋ねるのだ。

「メアド決まったらさ、一番に俺に教えてくれる？」

頷いた俺に微笑んでみせて、それで話題は終了とばかりに高原はじゃあ、と立ち上がる。気恥ずかしい俺には、そんな高原の自然な気遣いは心底嬉しいものだった。

親の了承を受けて、携帯を持たせて貰う事になった。他人どころか親とすら付き合いを避けている俺が、人とのコミュニケーションツールを必要とした事に、両親は驚きつつ喜んでいる様に見えた。

携帯を持つに当たって、一つ勇気を持ってトライしなければならぬ問題が浮上した事に、俺は気付いてしまった。心は大分怯むが、逃げずに挑まなければいけない問題だ。今からの新しい人生の為に、これからの、自分の為に。

教室内に声を掛けに行く勇気などはない。昨日高原が教えてくれ

た連絡方法、靴箱に手紙を入れるという方法を取らせてもらった。

指定した返事のメモが靴箱に返されると思っていたのに、放課後、また高原はわざわざ俺のクラスにやって来た。

注目を浴びたくないから取った手段だったのに……慌てて鞆を引っ掴み廊下に出る俺に、高原が小さく言った。

「ごめん、目立つ様な事して。でもさちよつと、手紙で返すには嬉し過ぎちゃってさ」

意味が分からない俺に、周囲を気にしてか高原が来て、と俺の腕を取る。ここは素直に人の居ない所に誘導して貰おう、と俺は早足の高原に歩調を合わせて歩き出した。

図書室にでも行くのかな、と思っていた俺を、高原は校外に出て、見知らぬ道を歩いてどこかに連れて行く予定らしい。

……こういう、先の見えないシチュエーションは苦手だ。顔を知った人間に痛い目に遭わされた経験を持つ俺は、否定を上回るフラッシュバックを重ねてしまうから。幾ら高原はそんな事をする様な人種じゃないと自分に言い聞かせようとしても。

だけど、苦痛を訴えてみる間もなく、高原はそこが目当ての場所だったのか、小さな公園に俺を導き入れた。木の切り株の断面になった椅子が点在するそこに、高原は無造作に座る。一つ一つが近過ぎず遠過ぎず、いい感じに配置された椅子に安心して、俺も高原の隣のそれに腰を下ろした。

「ここさ、何か落ち着かない？ 好きでよく来るんだ、俺」

分かる、と俺は頷いて。ただ、公園で話しよう、とでも歩きながら教えてくれたら良かったのに、と一言抗議してやりたい俺としては、不機嫌をそのまま口に載せた言葉を返していた。

「いい場所だから今は座ったけど、そうじゃなかったら俺帰ってたよ」

不意を突かれた様に、高原が驚いて俺を見た。高飛車に響いた不器用な強気の発言に早くも後悔している俺は、思わず目を伏せて、そのまま顔を下に向けて、誤魔化す様に言い添えてみた。

「……知らない場所とか、怖いから。今から何するとかが分かんないのも。黙って連れて来られるの、本当は俺駄目なんだ。だから……」

「ごめん」

まだ言葉を探していた俺を、高原が低く遮った。今回は深く落とした顔を挙げられない、ぐるぐる回る反省に泣きそうになってしまっていたからだ。

「ごめん、とまた高原が口にした。続く言葉を待つ俺に、降りてきたのは言葉ではなく――」

――視界が、暗く覆われた。次いで感じる、体の圧迫。体温。間近な心臓の搏動。爽やかな、でも男の匂い……。

抱き締められた、と気付いて、咄嗟にもがく様に手を出そうとした。なのに高原の強い腕は、身を動かす僅かな隙間をも俺に与えてはくれなかった。

羞恥よりも恐怖が先に立った、抑えようのない震えが全身に走り、その違和感にしろつか、高原がゆつくりと腕を解いてくれた。

椅子から動けず、その場で身を縮める俺を解放して、でも高原の手は俺の両腕に優しく残されたままだった。がたがたと震える俺に、静かな高原の声が降ってきた。

「ごめん……君の事を、まだ俺は何ひとつ知らないみたいだね」

予想とは違う言葉、それよりも声が近くなった事に、高原が自分の前にしゃがんだらしい事を気配で感じ、俺はびくつと肩を揺らした。

「どうやったら、君の事を傷付けなくてすむのかな。俺さ……君に近付きたいんだ。君の、力になりたい。君を救いたいと思ってる」

真剣な口調が、高原の人間性を表している様に聞こえた。恐らく嘘偽りのない、純粋な心配。触れた腕からも優しさが流れ込んでく

る様な錯覚、身を委ねたくなる安心感……。

体の震えは引いた、丸めた体から俺が顔を挙げる事など期待して
いないのだろう、高原はまだ優しい言葉を続けてくれる。

「図書室でよく逢ってただろ。何でかな、君の事が気になって仕方
がなかったんだ。明るく笑ってる方が似合ってるだろうに、いつも
俯いて暗い顔して。そんなの本来の君じゃない気がするさ。何か…
…心の底では助けて、って叫んでるみたいに見えるんだ」

……問題が、触れられたくない核心に近付きつつある。高原は、
どこ迄を知っているのだろう。危険だと、頭の中で警鐘が鳴り始め
るーー思わず、高原の手を振り払う様にして立ち上がった。いた。

「たちば」

「気持ちだけ、有難う。けど……救ってくれなくていい。力になる
とか。要らない」

小さく、でも強く言い切った。そのまま顔を見られない様に、き
びすを返して走り出した。高原が追って来る事がないのは分かって
いた、でもがむしやらに俺は走っていた。

……自己嫌悪。優しい相手の親切心を踏みにじってしまった。越えようとした壁を、また自分から高く頑丈なものにしてしまった……。

行きたくない気持ちが足を重くする、周囲より遅く歩いているのに、学校にはきっちり着いてしまうのだ。

考えるのは昨日の事ばかり。呆れて、もう図書委員なんてしてくれなくていいから、と高原に言われるだろう事を覚悟していた。

昨日の朝、俺は高原の靴箱にこうメモを入れた。『携帯を買おうと思っています。高原の持つてる携帯の会社はどこ？ 同じだと便利かなと思ったので』

でももう、携帯自体がなくなっちゃったな、と俺は溜め息をついて靴を脱ぐ。開けた靴箱の中に置かれていた大きな封筒に、俺は面食らった。

Docomoと印字された封筒に、中身は……電話機種のパンフレット。啞然とする俺は、ひらりと落ちた小さなメモに気付き、それを拾い上げた。

『姉貴が働いてるので、うちは一家全員ドコモです。良かったらパンフ見てね。買う時はゼヒ姉貴の店で！！ 頼みます 高原より』

そうして、右下に小さな文字で。『P.S：昨日はゴメン』。

――泣きそうだった。あんなに冷たく突き放したのに、恩を仇で返す様な仕打ちをしてしまったのに。嫌われて、避けられるだろうと思っていたのに。

――放課後に逢いに行ってみよう、と俺は思った。俺の方から謝らなきゃいけない、礼を言わなければならない。潔い高原の誠意に応える為に。

入って行く勇氣はない。教室の入り口から目立たない様に少し離れた場所で、出て来る人を見張るだけだ。

大分待って、ようやく見慣れた長身が何人かと話しながら出て来た。一人じゃないパターンは想定外で、声を掛けるタイミングを失い俺は焦った。

慌てて集団の後を追い掛ける。高原が行ってしまう、きっと今を逃したらもう俺は永遠に高原に声など掛けられなくなるのだ、また元の塞ぎ込んだ世界に逃げ込んで……。でもそれじゃ駄目なのだ、今、今こそ死ぬ氣の力を振り絞らないと……

切迫した考えは一瞬、極度の緊張に心臓がばくばくと鳴っている。それは自分には大きな音で、だが他の人には聞こえていないのだとは氣付きもしなかった。心臓の騒めきに掻き消されない様にと、俺は叫ぶ様に呼んでしまっていた。

「たかはらあつ!!」

尋常じゃない大声に、ありとあらゆる場所から視線が集まってしまった。振り向いた高原は、直ぐに破顔し、じゃあなと友人達の肩を叩き、足早に俺の方に歩いてきてくれた。

「図書室、行こうか」

俺の知った場所を指定してくれる高原の氣遣いに感謝しつつ、恥ずかしくて堪らない俺は、何度も頷き慌てて歩き出す。

中での私語は厳禁なので、今居るのは建物の裏だ。後ろに広がる林との境界にした、小さな木の杭が張り巡らされたそこに並んで座って、昨日の事怒ってないのかな、と考えつつも何と切り出そうかと俺が言葉を選ぶ間に。

「まだ、顔が赤い」

言うなり手が伸び、左頬に触れた。びくつと体を伸ばす俺が逃げの体勢を取る前に、だが高原の右手はすつと落とされた。くすつといったもの笑みで、高原は続けた。

「あんな大声出さなくても、ちゃんと俺橘の声聞こえるよ。必死だったの？」

含まれる、からかいの響き。自分の心臓の音が、なんて言い訳にするにも恥ずかしくて、俺は頷く事にした。大体、今日は謝りたくて来たのだ。こうやって何事もなかった様に接してくれる高原に感謝を伝える為に。

だから、俺はまず、ごめんなさい、と口にした。ん、と自分に向けられる相手からの視線を微かに避けながら、俺は続けた。

「高原が俺を心配して言うてくれたりしてくれた事、否定したりして。ごめんなさい。それと、有難う。俺みたいなの気に掛けてくれて、俺の分かってなくて気を害する言葉とかにも、怒ったり呆れたりしないで、こうやって俺の事許してくれて。本当に有難う」

一気に言った俺を見つめる高原の目は、本当に透き通っていて優しい。どんな返事が返ってくるのかと思ったら、高原は笑みも変えずに尋ねてきた。

「頭、撫でていい？」

「は?!」

驚いて目を丸くする俺の顔にずっと顔を近付け、高原が真面目な口調で言った。

「まず逃げようとする。でも今日は自分から俺のここに来てくれた。嬉しいからぎゅつとしてやりたいんだけどさ、橘にとっては刺激強過ぎるだろ? だからせめて、頭撫でたい」

……その理屈は筋が通ったものなんだろうかと俺は考えてしまう。けど普通に考えて男の頭なんて撫でなくなる筈もない、高原なりの相手の頑張りを評価するやり方なのかな、と俺は結論付けて、頷いた。

「う、うん。どうぞ」

どうぞはおかしいだろ、と自分にツツコミを入れた俺の頭に、優しく高原の手が載せられる。本当になでなで、とまるで子供にする様に手が動き、直ぐ間近に居る高原がどんな顔でそんな事をしていいのか気になりつつも、それを見てしまうには恥ずかしくて、俺は目を伏せていた。

……いつ迄、撫でてんだろ。さすがにもういいんじゃないか、と俺はちらりと上目遣いに高原の顔を窺い見ようとした。校内だし、どこから誰に見られているかも分からない。こんな、あらぬ誤解を受けてしまいそうな怪しい行為……。

俺が見上げた気配に気付いたのか、高原は手を止め、ようやくゆっくりとその手が下ろされた。何だかこそばゆい様な気恥ずかしさに、俺は言う言葉も見付けられずに視線を彷徨わせていた。ぼつりと、高原が問いを口に載せた。

「結局のところ、どっち？」

「え？」

主語を省かれ、何を尋ねられたのが全く分からない。説明する様に、高原が言い直した。

「昨日はさ、俺が困らせる様な事したからさ、いらないって言うたけど。俺、君の力になりたいって言ったよね。救いたいって。やつぱ今日聞いても答えはノーなの？」

――一歩で、決る様に胸元に入り込まれた感じた。避けられないパンチ……ごくろ、と俺は努力して唾を呑む。

瞬時に巡り巡った思考が、こんな状況で浮かんだとは思えない、都合の良い逃げ口上を落としてくれた。飛び付く様に、俺はそれを口に載せていた。

「……高原とこうして仲良く喋ったり出来るだけで、俺には救いになってるよ。すごい力貰ってる。これ以上に幸せな事ない位だよ」

笑ってみせたのに……笑い慣れない俺の笑顔がそんなに不自然に見えたのだろうか、高原はどう見ても納得なんてしていない顔で、じいっと俺を見つめている。

どうしよう。高原は、妥協を許さない人の様だった。中途半端な逃げは解決にはならないのだろう。上手い事言えた、と内心ほっとしていたのだけれど。

「えっと……」

考えて、考えて、俺はようようの呈で言ってみた。

「高原に出逢えた事が、本当に俺の救いだと思う。高原に声掛けて貰わなかったら、俺……生きてるのに死んでるままだったよ。高原のお陰で、ちゃんと生きてるって思ってる。嬉しい気持ちが増えて困ってる位」

見つめられて、最後の方なんか何を言ってるんだか自分で恥ずかしくて、俺は穴があつたら入りたい状態だ。そんな俺を、気が付けば直ぐ近い位置から視線を合わせてきて、高原は囁く様に尋ねるのだ。

「それ、本音？ 俺、役に立ってるの？ 橘の嬉しい気持ち、本当に増えてる？」

何の為の確認なんだろう、と俺は思う。とろりと絡みつく様な高原の目、甘いと思えない囁きに、また抱きすくめられる事になつてしまいそうで、俺は必死に予防線を張ろうと試みた。

「恥、恥ずかしい事の方が多いけど」

言いながら、じりじりと体を後ろに逃がしてみる。そんな俺の企てに気付いたのか、橘、と高原の手が伸びてきた――

バアン、と叩き付ける様にドアが閉まる音、それに被さる様に不機嫌な叫び声。

「出てきやいいんだろっ！！」

ガアン、と壁に蹴り込入れて、声の主が足音も高らかに歩いて行く。いつも図書室でふざけたり利用者に絡んだりする迷惑な人だ、と俺は気付いていた。抱き寄せようとしていたらしい手を俺の背に載せていた高原が、図書室から追い出されたらしいその乱暴者に気を取られた一瞬。

……いい時に大きな物音と大声、感謝します、と俺は、もう見え

ないその人の背中に内心頭を下げ、高原が動くより先に体を後ろに逃がしながら立ち上がった。離れた高原の手、酩酊していた様だった表情が醒めた様に、高原が何か言い掛けた。遮る様に、俺は強く口にしていた。

「とっ、友達だよね?!」

まだ何も返さない高原に、釘を刺す目的で繰り返す。

「高原と俺、ただの友達だよね?」

好きとかなしにーそう付け足したかったけど、実際口に出る筈などなかった。高原の優しさは、友人として心配してくれる範囲内のものだと思えた。昂ぶる様に色香を纏わせるあの熱っぽい目に、おかしい意味はないのだと思えたかった。

充分に離れた距離を置いて全身に緊張を走らせる俺を見返して、高原がふっ、と笑った。

「うん、友達。ごめん、何か誤解させちゃったみたいだね」

軽く返して、服に付いた草や砂をはたきながら高原も立ち上がった。向こうからあっさりと言われて、俺は意味もなく首を横に振ったりしている。近付いてくる高原にまだびくりと身構える俺に、置きっぱなしだった鞆を手に取り渡してくれながら、相手はさらりと言っただ。

「ごめんね。俺さ、可愛いものの好きフェチが尋常じゃなくてさ。今もそうなんだけど、君、人に慣れてない子犬過ぎるから。何してても可愛く見えるから、つい手を出したくなっちゃうんだ。あーよしよしって感じにさ」

……先程頭を撫でてきた感じ、に思えばいいのだろうか。男だとか人としてじゃなくペットの様に見られてしまっているらしい事は不快ではないが、可愛いとか称されるのには問題あるかも……。

複雑な思いの俺に、高原は静かに告げる。

「ごめんね。何か俺舞い上がっちゃったみたい。橘に友達だっと思ってもらえてんのも、純粋に嬉しくてさ。……俺達、友達なんだよね?」

今度は高原が俺に確認してくる。どぎまぎする恥ずかしさがまた沸き上がるが、どうにか真面目な顔で俺は頷いた。

「……うん、勿論」

にこつと笑ってみせて……帰ろうか、と高原は言ってくれた。

――閉じた目の奥に、高原の優しかったり色っぽかったりする顔が貼り付いて、なかなか眠りは訪れないのだ。

次の日、その次の日と高原は現れなかった。安堵と寂しさを半々に感じたりする自分が意外だった。そうして今日は金曜日、今日を逃せば月曜日迄高原に声を掛けられない。大事な用事に、登校して一番に俺は靴箱への手紙を置いた。

『携帯を買いたいから、高原のお姉さんの勤めてるお店に案内してもらえると助かります。今日の帰りにでも、高原の用事がなければ……』

――どんな形で返事をくれ、といった事を指定しない一方的な文面に、俺は後悔していた。これじゃまた、高原を来させてしまうかも。俺って何て考えなしなんだろう。

自分からまた高原の教室に行くべきなのか……踏み出せない躊躇に悶々とする俺を、休み時間に担任の先生が呼んできた。

「おい橘、新生図書委員。預かりもんだぞ」

渡された用紙は、この間初めて紹介された時の図書委員会のもだった。二枚に亘る、議事録、と題された書類には、正式に俺を図書委員に任命する、というのに始まり、話し合っていた内容や、恐らく決定したらしい放課後や土日解放時の業務担当者の割り振りの表が示されていた。

目を通して、最後の行の様に付け足されたものらしい高原のメッセージに気付き、俺は破顔した。『姉貴大喜びだよ。今日の放課後、校門の左側でおちあいましよう。急いで行くから!』。

目立たずに連絡を取る事を考えてくれた高原の気遣いに、心底俺は感謝する。でもふと気付いた、高原は本来生徒会に所属しているけれど、人員不足の為に図書委員を兼任しているのだ。確か部活には所属していないらしいが、忙しいには変わりないだろう。

そんな合い間に、自分なんかにつき合わせるのは申し訳ないな、と思う。まあでも今日携帯を買えば、これからの連絡は逢わなくても出来る訳だから。今日だけ、我慢して貰おう。

そんな色々を考えるのが楽しいと感じる事に、俺は気付いてはいなかったけれど。

校門の左側、地形的に少し窪んで大きな木が植えられた場所に、高原は既に待ってくれていた。俺が声を掛けようとする前に、俺の後ろから数人が高原を呼ばわった。

「マサじゃん。何してんのー」

……人気者だもんな、と気付かれない様に下がりながら、俺は思う。俺なんかとの接点、皆に不思議に思われるだろう。矢張り携帯は早く持つべきだな。

わざと隠れたのに、声を掛けてきた友人数人にまずおう、と返しただけで、あろう事か高原は俺の居る方に向かって来ている様に見えた。まさかと目を剥く俺の前に高原は立ち、極自然に俺の手首を掴み――

「今日は橘と買い物なんだ!」

わざわざ皆の前に引っ張って立たされる、まるで皆に自慢するかの様に……友人達が、ああ図書委員のね、こないだの、と納得するのを、俺は困惑して高原を盗み見ながら俯いていた。

どうか行くの、と聞かれ、鞆でもぶらぶら見に行こうかな、などと高原は適当に返している。じゃあな、邪魔しちゃ悪いからな、と友人達が去って行くのに手を振っている高原の右手から、まだ掴まれたままだった自分の手を、俺は乱暴に取り戻した。目を向けてきた高原を、つい俺はきつと睨み上げる。

目立つ事が嫌なのは、承知してくれていると思っていた。委員会の議事録に返事を載せる手段なんてとってくれた配慮が、その証拠だ。なのに。

「ここでもいいの？ また誰かに声掛けられちゃうよ」

真面目な顔で言われて、俺ははつとする。次々に下校して来る生徒達が二分の一の確率で通るここに、いつ迄も居られない。何も言わない高原に、俺が促す形になった。

「……お姉さんのお店に、案内して貰える？」

うん行こうか、と歩き出した高原に、やや離れて俺はついて行った。

考えてみれば、俺が高原に怒る義理はないのだ。もしかして今日、高原が誰かからの誘いを断って俺を優先させてくれたという可能性だってある。俺は俺一人の一方的な要求・不満を相手にぶつけているだけだ、相手がどんな人物でどんな状況にあるか、などを一切考えないで。

歩きながら、いつも何か話し掛けてきてくれた高原が今はずつと無言なもの、勝手に怒りをぶつけた俺に気を害したからかも知れない。乱暴に手を振り払ったりして。

……見上げる事は出来ない。そんな勇氣はない。だけど、この重苦しい雰囲気は何とか自分が打破しなければ。

小さく、俺は努力して声を落としてみた。

「……ごめん。俺が怒るのおかしいのに」

「え？」

俯いた声は下に流れる、高原に聞こえないのは仕方がない。僅かに顔を挙げて、俺はまた口にした。

「俺が勝手に怒ったせいで、今嫌な感じにさせてる。……ごめん」
高原の返事はなかった。本当に、相当嫌な気分にさせてしまってたんだ、と俺は軽々しい自分の物言いに今度は蒼ざめる。あの穏和な高原に、沈黙を選択させるなんて。

もう、足が進まなかった。道の真ん中だと分かっているながら、俺は立ち止まってしまう。橘、と掛けられた高原の声が優しいのに、来て、と俺の二の腕に触れ促す様に引つ張る手付きが柔らかく慎重なのに、俺ははっと顔を挙げてしまった。

怒ってはいない、見慣れた優しい笑みを浮かべた高原の顔を見てしまつて、でもこれはきつと建前の顔なんだ、と俺は目を反らした。先程振り解いた事を反省しているだけに、引つ張ってくる高原の手を今度は俺はどかせない。高原の優しい声が、恐らく身を屈めてくれたのだろう、近い位置から俺の耳に入ってきた。

「少し歩いたら、こないだの公園に着くから。来て」

頷いた俺は、優しく手を引く高原について、止まってしまつていた足を無理矢理に動かした。

自分で勝手に座る向きを調節出来るのが有難い。先日は、そう思っていた。なのに今は、俯いた俺の真正面に、しかも俺を覗き込む様に腰を落として、高原は座っていた。

逃げ場はない。高原がそうするのは多分に自分への怒りのせいだ、と思うから耐えているけれど。……ぎゅっと体を包まれてしまった事もある、今思い出す必要はないのに何故だかそれがやけに思い出されてしまい、ますます俺は顔を挙げられずに居る。

「橘」

声を掛けてきてくれる高原に、今は相手からじゃなく自分から話をしなければならぬ、と俺は焦った。意味もなくここに立ち寄りせた事も含めて、自分が謝るべき事態だ。

最大限の勇氣をもって俺は顔を挙げた、待ち構えている高原とばかり目が遭ってしまうのに面喰らいながらも、勢いを利用して俺は口を開いた。

「ごめん、俺が怒るのがまず間違いなのに。ちゃんと謝れないし。高原の貴重な時間無駄にして」

一度に色々盛り込んだせいか、ん？ などと高原は小首を傾げただけだった。自分自身で再度言葉を噛み砕き、俺は続けた。

「……俺が馬鹿な態度取るから、高原に嫌な思いさせた。高原忙しいのに、わざわざこんな用事に付き合って貰ってんのにこんな無駄な寄り道とかさせて。俺、が」

後は何を謝るべきか、箇条書きが苦手な俺にはぱつと浮かばなかった。考えに浸ってしまった俺に、ははっ、と楽し気に高原が笑いを聞かせた。

「本当にさあ、何て言うか……何から言えばいいのかなあ」

呆れている、と俺は身構えた。本当馬鹿なんだなお前、と蔑まれる位なら普通だ、お前みたいなのにつき合ってられないやと去って

しまわれる可能性を考慮し、俺は固唾を呑んで高原を見つめている。
心底優しい笑みで、高原は優しく言い出した。

「何で、ごめんなの？ 何で君が怒るのが間違いな？ どんのが馬鹿な態度なの？ 何で俺が忙しいと思うの？ 俺が貴重な時間無駄にして君に付き合っただけでやっただけで、どこからそう思うの？」

俺の言葉の殆どを切り返す質問の嵐に、俺は啞然として高原を見つめていた。答えを求めてはいないらしく、直ぐに高原は続けた。

「自分の事卑下するのは良くないよね。君を怒る人はいないんだから、自分を殺す必要もないよね？」

……何か、含みがある様に、それは聞こえた。けれども問いを挟む度胸が俺にある筈もなく、またどんな小さな事でも真意が明かされる事が怖い俺としては、分かった様に頷くだけだ。唐突に顎に手が掛かり、ぐいつと上を向かされた。

「すぐ俯くのも良くないな。折角の顔が見えなくなる」

そう言う高原の顔が、また直ぐ近くにある。普段は眼鏡に中和されているけれど、近付くと分かる端正な顔に對峙させられて、俺は息を呑む。……甘く漂う雰囲気はない。熱を孕んだおかしな空気もない、だからこそ逃げずに我慢は出来ているけども。

「今の俺、嫌な思いさせられてる様に見える？」

その問いには答えを求められているらしいが、言い出した当事者の俺がそれを肯定するのも否定するのも、何かおかしい気がする。ただ今迄の流れからいって、と卑怯にも空気を呼んで、俺は首を横に振った。

「う、ううん」

にこつと、正解にか高原が笑った。息の掛かる様な近い位置で話をする事には慣れているのか、そのままに相手は会話を続ける。

「今日はさ、嬉しい事沢山だよ。橘が自己主張した。橘の方から一生懸命俺に近付こうと努力してくれてる。今も、逃げないでいてくれる」

そうして、ゆつくりと顎の手が離れた……最後の一言を言わしめる為の、知らなかったが布石でもあったらしい。

俺に対するリハビリみたいだ、とふと思った。悪い所を正そうと指摘して俺に言い聞かせてくれてる様に思える……

「俺にとつて、橘と過ごせる時間は何より大切に、嬉しいものなんだ。こんな寄り道、大歓迎だね」

――博愛主義者なのかな、と思う。弱い所を敏感にキャッチし、助けようと動く事が出来る人なんだ。そんな事を考えながら、高原の深い意味のありそうな台詞を、俺は余り理解を求めずに聞いていた。

「覚えておくといいよ。君といて、俺が嫌な思いする事なんて絶対にないって」

「……う、うん。有難う……」

柔らかな口調から滲む強さ、言い切る自信に、ついそう返していた。……どうやら本当に、先程の俺の態度や言動にも怒ったり気を悪くした風はない様だけれど。

「可愛いもの、俺いつ迄も眺めていたいんだ。出来ればすぐ近くでさ、もつと言うなら触れていたいしさ」

真っ直ぐに俺を見つめて、また高原は際どい台詞を発するのだ。許容の限界を超えるそれに、さすがに俺は口を挟まずには居られなかった。

「……俺、一応男だから……。高原、趣味悪いよ」

はははっ、と高原は心底おかしそうに笑った。言うねえー、とばしばしと俺の肩を叩いてくる。そこ迄大笑いされて、ほっと俺も口を綻ばせた。

矢張り結局は相手に助けられて。じゃあ行こうか、と促されてしまつて、慌てて俺は立ち上がる。せめて店に着く迄は、と俺は、これ迄にない頑張りで自分から高原に話題を提供するのだった。当たり障りのない図書委員の仕事についてなど。

「いらつしゃいま……あ、まさなお」

高原の紹介を受ける迄もなく、高原と同じ顔の、綺麗な優しい顔付きの彼のお姉さんがそう呼んだ。客が少なく空いた時間らしく、他の店員さんに案内され、直ぐに高原と俺はカウンターテーブルの向こうで待つお姉さんの前に立った。

「お待ちしておりました、お話は伺っております。新規での御購入のお手続き、と言う事で宜しかったでしょうか、橘かいり様？」

「は、はい。宜しく願います」

緊張して頭を下げる俺を、何だか高原と同じ様な表情でお姉さんは見ているのだ。……いわゆる、『可愛いもの』を見る目付き。さつさと椅子に腰掛けて、高原が俺にも座る様に促してくる。どうもとかまたぺこりとしながら椅子に腰掛ける俺に、お姉さんのぼつりと落とした声が聞こえた。

「顔もだけど、声もなのねー。まさなお、上出来。ケーキおごつてあげる」

「姉貴、仕事」

笑って、高原が促した。はっと立ったままで緩んでいた顔に気付いたのか、お姉さんはきりっと仕切り直した仕事人の顔で、椅子に腰を下ろし俺に話し掛けてきた。

「失礼致しました、それでは早速ですが、機種などはお決まりでしょうか？」

「それが……余り良く分からなくて」

正直な感想を、俺はももごと口にする。パンフは見た、全部隅々迄読んだ。だけでも携帯初挑戦の人間にとって、進み過ぎた技術の説明はまるで外国語を見ている様で、どうにも解読不能だったのだ。

横から、高原が問題を噛み砕く様に聞いてきた。

「色とか見た目とかの希望はあるよね？ ごつごつした四角いの嫌

とか、薄くて軽いのしか嫌とか、ごちゃごちゃデコレーションしてあんの嫌とかさ」

「うん、それはある程度。……派手な色は苦手。四角いとか丸いとか薄いとかはそんなに気にしないけど。一番に、操作がすごく簡単なのじゃないと、多分俺人より理解力ないし使えないと思う。そんなには使わないと思うから、あんまり機能は良くなくていい。……です」

つい高原に返していたが、パンフを広げてくれているお姉さんに向けて、焦って語尾を付け足した。お姉さんのにこりと笑みを深める優しい雰囲気は高原と同じで、何だか俺は安心してしまっただった。

「使用目的は主にメールと電話になるだろうね。カメラ、使う？」

高原に尋ねられても、俺には咄嗟の返答は出来兼ねる。使われないかな、と返そうとしたのに、何故だか高原にすぱつとまとめられた。「カメラは使っていてどうか。適度に高画質なやつがいいね。他に望む機能は？ ……今はない？ 分かんないよね、実際使ってみないとね」

弟の仕切りを笑顔で見守って、お姉さんは携帯を二つ、すつと差し出してきた。

「お形二種類ございますが。こちらのスライド式のものと」

向かって左側の携帯の、上部分だけを滑らせる開け方に、俺は余りにも驚いてしまった。初めて見た、食いつく様に見る先、今度は右側の携帯が、お姉さんの手の中、もう一方の手も使わず魔法の様に自動で開いた様に見えて、俺はそちらにも釘付けになってしまう。「こちらのオープン式のものとがございますが」

「どっ……どうやって開いたんですか今の」

右側のそれに、つい俺は反応してしまった。携帯の側面のボタンを示して、お姉さんが丁寧な説明と再度の実演をしてくれる。

「こちらのボタンを一度軽く押して頂くだけで、自動的に閉じた画面が開く様になっております。どうぞ、お手にとってお試し下さい」

手渡された携帯を、恐る恐る説明通りに操作してみる。パカッと小気味よく開く感触に、俺は感動してしまっていた。

「すごい、恰好いい……。手品みたい。かつこいいや……」

夢中になって何度も開閉を楽しみ、下から横から携帯をぐるぐる回して眺める俺を、二人はにこにこしながら見守ってくれていた。余りに長い事楽しんできてしまった事に気付き、俺は慌てて携帯をテーブルに置いて返した。

「ご、ごめんなさいいつ迄も。つい」

俺の恥ずかしさをさらりと流す様に、お姉さんは何冊かパンフをめくっては広げ、示してきた。

「こちらのワンプッシュオープンのものでお探し頂きますと、これですとか、こちらになりますね」

指で示されるあちこちを目で追うのも一苦労だ、ついていけない俺に、問題を根本から打開する様な高原の提案が落とされた。

「選ぶの大変じゃん。俺のと同じのにしてみる？ そんなに難しくないしこれ。橘の気に入ったワンプッシュオープンだしね」

鞆から取り出した自分の携帯を、高原は俺に手渡してきた。勝手に触るのは躊躇われる俺の手の合い間から操作し、高原が自分の携帯の画面を開いてみせる。

目に入った待ち受け画面、お姉さんや両親らしい人と一緒に笑って写った高原の、多分家族でのものらしいそれ――

だからか、と俺は納得する。高原は愛情いっぱい家庭で優しく育ったのだ、だから他人への愛情に満ち、誰にでも優しく出来るのだろう。俺とは違って。

――今こんな所でうじうじそんなの考えてどうする、と珍しく俺は頭の中に暗く落ちてきそうな考えを振り払おうとした。『優しい』高原は俺と居て嫌な気になる事はない、なんて言ってくれたけども親切に付き合ってくれているこんな時に、馬鹿みたいに黙り込んだり暗くなったりするなんて最低だ。身の程知らずだ！

気を奮っている俺には、画面を覗き込む為に身を寄せた高原の顔

の近さを意識する余裕もなかった。これがメール送信画面、これが電話帳、これがカメラ、と高原が教えてくれるのを目で追う事に必死だったせいもある。

くすつと笑って、お姉さんがそつと言い添えてきた。

「只今キャンペーン中でして、そちらの機種自体のお値段も下がっております。更にお友達紹介が適応されまして五千円の割引、学生さんですので学割、全くと新規でいらっしゃいますので初めて割引などにも対応致しております。後は……そうですね」

他の店員に聞こえない様にか、こそつとお姉さんは囁いた。

「私が個人的に認定した可愛い人に向ける、キュート割引も適応になりますね」

ぷつ、と高原が吹き出した。しれつと沢山に広げたパンフをテーブルの上から片付けるお姉さんの澄まし顔に、俺は無理に笑おうとして複雑な顔になってしまった。……高原姉弟の好みは偏っていると俺は思う。

早速買った携帯の操作方法を、帰り道に高原に教えて貰う。家に着く頃には、何とか電話・メールの初歩的な理解が得られていた。気が付けば家の真ん前迄来ていた。家に着いたから、とも気軽に言い出せもしない俺は、不自然に黙って足を止めた。携帯から顔を挙げた高原に、焦って選ぶ暇もなかった馬鹿な一言を投げてしまっていた。

「後は自分で説明書読むから、もういい」

言い方こそ柔和であれば、そこ迄ぶしつけに突き放した響きは表れなかっただろう言葉。自身で思わず息を呑む程に。

しまった、と後悔に苛まれ、俺はまた下を向いてしまう。ここが俺の家だとこの状況で高原に分かる筈もない、俺の暴言は高原にとって、親切に突然水を差すだけのものだったに違いない。

「橘……」

今迄は聞いた事のなかった呆れた響きが、そこにはあった。さすがにもう寛容な高原にも限界だったんだ、と俺は目をつぶる。今更ごめん、なんて言葉を挟む事も出来ず、俺は肩から広がりつつある震えに飲まれそうになっていた。

「あのさ……俺と、ちゃんと会話して？」

言われた言葉の意味が分からず、思考が止まる。

「ごめん、触るよ」

強く言い切った一言と同時に、頬を掴まれ顔を挙げさせられていた。ぐいっと、いつもの高原とは違う乱暴な手付きで更に目に掛かる前髪をどかされた。

「君の言葉さ、ただでさえ分かりにくいんだよ普段から。今の言葉は違うつて今思ったでしょ、自分で。そういう時はそう言うんだよ、今は違うつからって。どうしよううつて俯くの止めてさ」

一気に核心を突く事を言い当てられて、俺は息を呑んだ。怒っているんだろうか、口調すらいつもとはきつく、高原は続けた。

「どうして俺が目の前にいるのに、自分に話し掛けちゃうの？ なら俺いらないじゃん。大体さ、自分の中でだけ自問して、答えなんか出るの？ ぐるぐる堂々巡りするだけなんじゃないの？」

……何も、言えなかった。今迄にない迫力に、目を反らす事も許されない気がして、俺はなるだけ脅えを隠しながらに高原を見つめていた。

不意に天を仰いで、はあつと高原は溜め息をついた。次いで戻ってきた顔が、俺を見て、近付いて……

ーぴたつと額を合わせられて、俺はびくつと全身を震わせた。高原は今は目を閉じている、閉じてはいるけれど、近い、一転して小さくなった声の放つ息すら掛かる程に。

「……ごめん、取り乱した。今日はさ、何か説教くさいよね俺。嫌われたくないから言っちゃ駄目だつて思ったんだけどさ、言わずにいらなくてさ。嫌われてでも言うのが友達だしね」

ずきん、とそれは心を揺らした。ぱちつと高原の目が開いた、――恥ずかしさではなく、何か強い気持ちに包まれた様な不思議な感覚で、俺は高原を見返していた。唇すら触れてしまいそんな近さにも関わらず。

怯まない俺を見て、高原の目がいつもの優しさに細められる。すうつと頬の手と共に額が離され、高原が遠去かる……待つて、などと危つく俺は言いそうになってしまっていた。

そうして、何か縋る気持ちにでもなってしまったのだろうか、離れる高原との距離を埋めでもするかのように、無意識に俺は高原に身を近付けていた。

「ん？」

はっとして直ぐに体を戻したのに、目聡い高原には気付かれてしまったらしい。

「どうしたの？」

「分、分からない……」

ああ迄言われた直後だ、黙ってやり過ごす事は出来なかった。けれど今の自分の行動は余りに衝動的で唐突で、本当に説明が出来そうにないのだ。困惑のままに、俺は繰り返すしかなかった。

「分からない……」

「うん。俺にもよく分かんないけどさ」

とろりと、眼鏡の奥の高原の目が甘く細められていた――お馴染みの危機感を覚えて、俺は身構える。それより先に、素早い高原の手に引き寄せる様に抱き締められてしまった。また……！

「今のは、橘が悪いんだよ」

耳元に、囁きで告げられる。驚きに、俺はもがこうとする。封じる強さで、高原は続けた。

「離れないで、って顔した。自覚、ある？」

……不覚にも、それには思い当たってしまう。無意識に近付いたりなんかして、きっと今自分はそんな不安定な顔をしていた、のだから、と思う。とは思っけれども。

ひっそりと隠れる様な場所、人通りがない事からこの場所を家として選んだのは自分で、今も誰一人周りには居ないけれども。

恥ずかしさは幾度同じ事をされようと変わらない、俺は必死で暴れた。意外とあっさりと腕を緩めてくれて、すんなり俺は高原の胸元から身を離す事が出来た。残念そうに、高原が呟くのが聞こえた。「あーあ。さっきのものの欲しそうな顔、も一度見たかったのにな」

きつと、羞恥を隠す為に強い目を高原に向ける。相手が望む様な顔とは程遠い様に。

何か言いたかった、何か抗議してやりたかった。今は自分の油断だとしても、今高原を触発したのは自分なのかも知れないけれど。「と……友達なのに、何でこんな事するんだよ?! 俺が嫌がるの知ってて」

答えを聞くのが恐ろしい質問を、敢えて俺はぶつけてしまった。考える事もせずに、高原が即答する。

「君の反応が可愛い過ぎるから。条件反射みたいなもんだから、俺にも止められないんだ」

「……ふざけるな」

らしくなく、声を荒げてしまう。俺が初めて怒りを顕わにするのに、高原は真剣に向き合ってくれている様だった。からかう色をなくした声が、一瞬で切り込んでくる様に告げた。

「君に足りないの、自信でしょ。人前で顔を挙げて何か言う勇氣。わざと他人との接触を避けてる限り、直らないよね。俺のやり方も荒治療だと思つよ、でも君の心を開く取っ掛かりにはなると思つんだ。君の心を開きたいんだ、俺。君は大事な友達だからさ」

俺の下らない虚勢など吹き飛ばす様な、高原の言葉。強気は早くもぐらつき、俺は高原に押される形になっている。まごつき言葉をまとめられない俺に、高原は静かに続ける。

「多分人より沢山の事考えてる。なのに一つも口には出さない。それって周りからするとどかしいし、勿体ないと思うよ。いっぱい話してよ、俺に位は。色んな気持ち教えてよ」

……どうしてそんな優しい声で、慈悲に満ちた顔で。泣きそうになるのを俺は必死で堪えている。ここで泣くのは振り出しに戻る事だと、俺には分かっている。さすがに、気付いている。

だから、俺は毅然と顔を挙げてみせ、高原を見つめた。

「……分かった。努力する」

俺の精一杯を受けて、高原は実に嬉しそうに笑うのだ。

「うん。今みたいだね」

小さな俺の一步を、高原は絶対に見落としたりしないんだろう。

視界に高原の手が伸びてくるのが映る、いつもなら脅えてしまう肩を今はぴくりとも揺らさない様に、俺は体に力を込める。

それも含めて讃える様に、高原の手が柔らかく俺の頭を撫でる。

矢張り澄んだ優しさが流れ込んでくる、……相手が手を下ろす迄の僅かな間、俺は心が洗われる感覚に身を浸す事が出来ていた。

互いに口は開かなかった、漂う空気は今迄と違い、何と言うのか

――信頼に満ちている、と俺は思った。高原の行動の真意、根底にあるものが理解出来た様で、今から幾度高原の突然の抱擁を受けようと、自分はもう逃げずにそれを受け止められるかも知れない、と俺は思った。……今日は、もう限界だけど。

沈黙を、そつと俺は破った。

「今日は……色々有難う。うち、ここだから。頑張つてメールするから」

じゃあね、のつもりの言葉は、最後の一言が多分に高原を笑顔にさせたらしい。

「分かった。――待ってる」

頷いて、歩き出す高原を見送る。何度も振り返る高原に向けてその度に小さく手を振りながら、少し照れくさくなって俺は考えている。友達より上、親友、だと思ってもいいのだろうか……大事な、大切な親友……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6495y/>

ココロノヤミヲトカスヒト

2011年11月21日17時06分発行